

島根半島における社叢林の種組成と神社の属性

島根大学生物資源科学部 久保満佐子
島根大学自然科学研究科 長尾知輝

1. はじめに

日本の原信仰が森や樹木を主体とする信仰であったことは広く認識されており、神社を囲む森は社叢林とよばれる、神をまつる森である。長きにわたり信仰の対象として守られてきた社叢林は、現代では都市緑地としての環境保全や防災、景観形成などの機能、多様な動植物の生育生息場所としての機能も持っている（宮脇 2000, 上田 2003）。江戸期以前の村には、必ず社叢林が一つあったとされ、祭祀と信仰を通じて人々の生活と密接に関わっていた。しかし、明治に入ると神社合祀令の強行や、人々の意識の変化から、社叢林は減少した。こうした状況の中、社叢林が地域の人々の生活の上で重要であると共に、生態学的に貴重なものとして、社叢林の保護に全力を尽くした南方熊楠の書簡は有名である。また、同時代の植物学者であった白井光太郎は「近頃は神職も人民も社殿を神社と心得て、樹木は神社の装飾と考へて居るが、是が大なる誤である。」と記している（白井 1936）。現代の社叢林は、このような逆風を耐え、その景観や機能を現在に伝えており、生物多様性の上で重要な森林としても認識されている。しかし、社叢林は令和の時代においてもまた、その存続が困難な場合や、竹林の侵入などにより原生的な植生が失われる場合もある。

島根県は日本古代史の重要な地域であることから多くの神社があり、松江市では神社庁に記録されているもので 173 社がある（島根県神社庁 1981）。松江市の社叢林はスダジイを主体としたものが報告されているが（宮脇 1983）、こうした調査が行われた 1980 年代から 40 年以上が経過した現在の社叢林の状況は明らかではない。そこで本研究では、松江市の神社を対象として、社叢林の有無と樹木組成を調べ、社叢林の状態を明らかにする。

2. 調査地と調査方法

調査地は島根県神社庁（1981）に掲載されている松江市内に鎮座する神社 173 社である（図 1）。本研究では、並木状の樹林、道路により寸断されている森林を除き、神社に隣接する森林を社叢林と定義した。

173 社の社叢林の有無と植生の種類を把握するため、まず航空写真と現地調査から各神社の植生を「あり」と「なし」に区分した。さらに、社

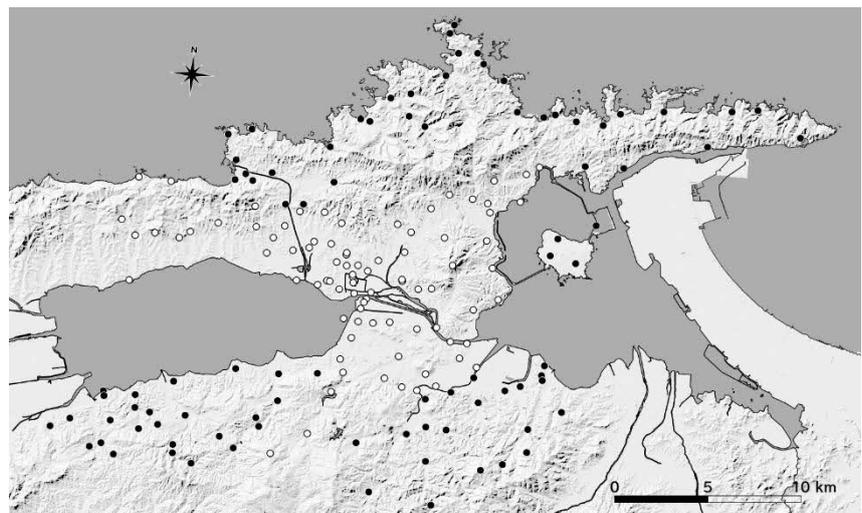


図 1 調査地位置図

白丸は旧松江市, 黒丸は旧八束郡を表す。

叢林「あり」と区分した神社について、航空写真および現地調査から広葉樹林、針葉樹林、竹林を区分した。これにより、松江市の神社を、広葉樹林の社叢林を持つもの、竹類を含む広葉樹林の社叢林を持つもの、竹林の社叢林を持つもの、針葉樹林の社叢林を持つもの、社叢林なしの5つに区分した。次に、社叢林周辺の土地利用を把握するため、神社周辺の土地を市街地、田園、山林の三つに区分した。また、神社の標高および海からの距離をQGISを用いて調べた。

社叢林の樹木組成を明らかにするため、社叢林を持つ神社で調査区を設置して植生調査を行った。調査区は群落高に応じて設定し、各社叢林の植生を代表する場所に設定した。各調査区の低木層から高木層までの各層の群落高 (m) と植被率 (%), 各層に出現する植物の種類と被度を調べ、被度はBraun-Blanquet (1964)による被度階級 (+ : 1%以下, 1 : 1~10%, 2 : 10~25%, 3 : 25~50%, 4 : 50~75%, 5 : 75~100%)を用いた。さらに、調査区の斜面方位と傾斜、地形を記録した。また、調査区内にある樹木の胸高周囲長が最大のものの値を記録した。

3. 結果と考察

島根県神社 (1981) に掲載されている松江市の神社 173 社を対象として、社叢林の有無を調べた結果、137 社に社叢林があり、73 社が広葉樹を主体とした森林、45 社が竹と広葉樹の混交林、8 社が竹林、11 社が人工林であった。社叢林が残っている場所は山地近傍が最も多く、市街地では少なかった (図 2)。海からの距離は内陸に行くほど広葉樹林の割合が低くなり、竹を含む広葉樹林の割合が高くなった (図 3)。松江市は、日本海からおおよそ 5-15 km の範囲に市街地があるため、竹の侵入と人為の関連を示唆するものと考えられる。標高は 50m以下に 140 社 (81%) があり、社叢林を持たない神社のほとんどが標高 50m以下であった (図 4)。最高標高は那富乃夜神社 (455.9m) であった。

旧松江市には調査対象の神社は 83 社あり、広葉樹林と竹を含む広葉樹林の合計 48 社 (55 調査区) の種組成を調べた結果、出現回数と平均被度はスダジイが最も高く、サカキやヤブツバキ、モチノキなどが多かった (表 1)。森林の優占種はスダジイ林が最も多く、その他にモミ林、タブノキ林などであった。

二元指標種分析を行った結果、種組成は 4 つに区分され、タケを含むモミとスダジイの植生、ウラジロガシやモチノキなどの常緑樹種を含むスダジイおよびタブノキの植生に分類された (図 5)。スダジイ林は暖温帯域にある松江市の代表的な植生であり、胸高周囲長が 300cm を超えるスダジイが 21 箇所を確認された。

さらに、古くから信仰されている荒神を含む森が残されていた (写真)。スサノオとヤマタノオロチの神話は島根にある最も魅力的な神話ともいえるが、さらに古い信仰として蛇の信仰があり、荒神は蛇を模した藁蛇を樹

表 1 平均被度が多い樹種

	種	出現回数	平均被度
スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i>	46	49.85
サカキ	<i>Cleyera japonica</i>	38	11.93
タケ類	<i>Phyllostachys sp.</i>	19	9.31
ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i>	38	7.89
モチノキ	<i>Ilex integra</i>	44	6.61
モミ	<i>Abies firma</i>	11	5.69
ウラジロガシ	<i>Quercus salicina</i>	14	4.74
ササsp.	-	14	4.11
タブノキ	<i>Machilus thunbergii</i>	32	2.80
ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>	31	2.80
クロキ	<i>Symplocos kuroki</i>	25	2.78
アオキ	<i>Aucuba japonica</i>	19	2.36
コナラ	<i>Quercus serrata</i>	8	2.34
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>	13	2.18
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	5	1.76
ヤマモモ	<i>Morella rubra</i>	5	1.39
カクレミノ	<i>Dendropanax trifidus</i>	15	1.30
ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum</i>	21	1.25
モッコク	<i>Ternstroemia gymnanthe</i>	15	1.03
ネジキ	<i>Lyonia ovalifolia</i>	5	0.96

木に巻き付ける。島根半島の社叢林は原生の自然という生態学的な視点だけではなく、信仰と共にある森を見ることのできる貴重なものである。今後、さらに旧八束の海岸沿いおよび山間部の調査を行い、松江市全域の社叢林の特性を明らかにしていく。

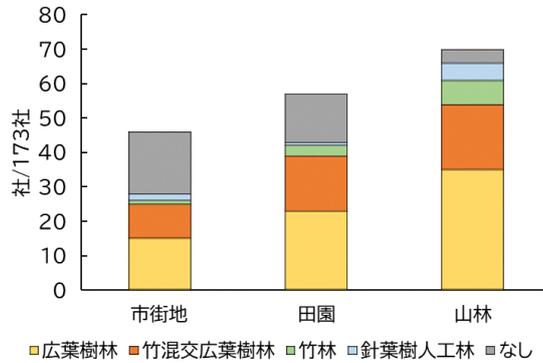


図2 土地利用と社叢林の種類

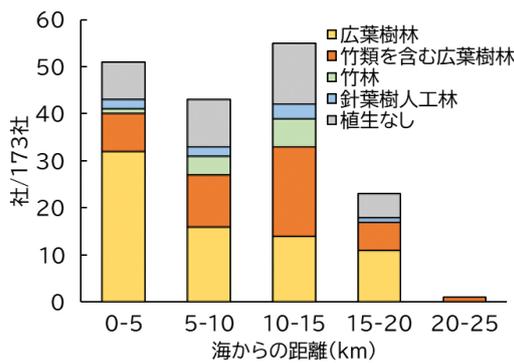


図3 海からの距離と社叢林の種類

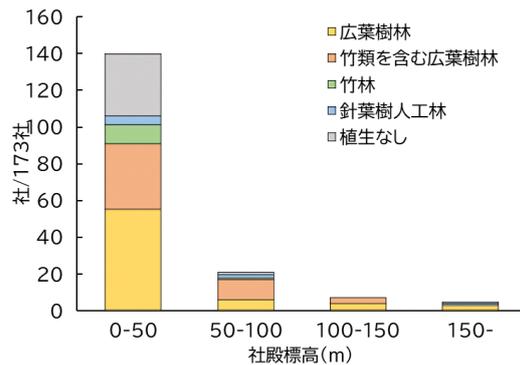


図4 標高と社叢林の種類

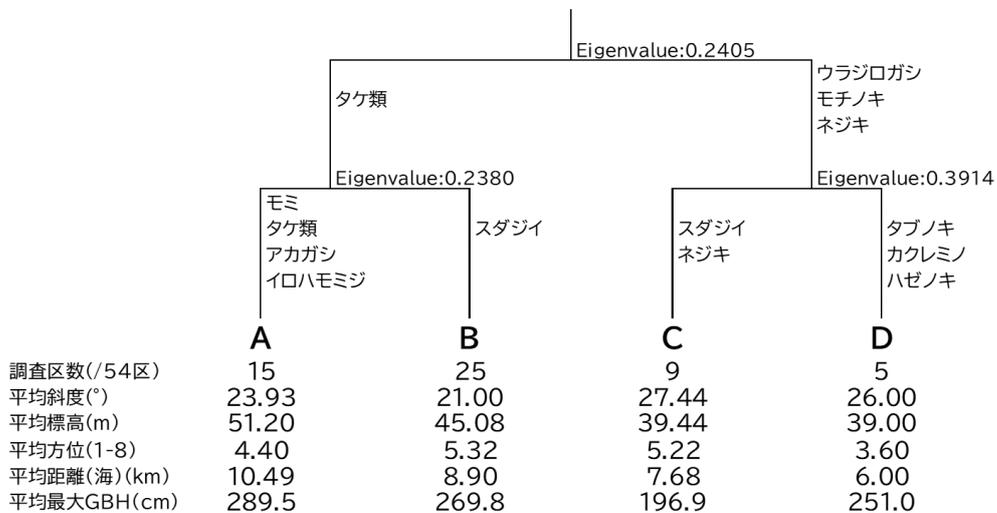


図5 二元指標種分析による旧松江市の社叢林の分類

引用文献

Braun-Blanquet J (1964) Pflanzensozioologie, 3 Aufl. Springer-Verlag

上田篤 (2003) 鎮守の森の物語, 思文閣出版

島根県神社庁 (1981) 神国島根, 福間秀文堂

白井光太郎 (1936) 本草学論攷, 春陽堂書店

宮脇昭, 板橋興宗 (2000) 鎮守の森, 新潮社

宮脇昭 (1983) 日本植生誌 中国, 至文堂出版



写真 松江市の社叢林の外観と荒神